妄想IS～もし一夏があの人の弟子だったら～

一条

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～

【Ｎコード】
Ｎ５４７０Ｓ

【作者名】
一条

【あらすじ】
少年は力を求めた。過去に自分のせいで大切な人が大事なものを失ったから。世界最強を決定するモンド・グロッソにおいて、自分のせいで姉が連覇を逃したのだ。誰かを守る力を欲した少年が邂逅した人物は、伝説のデビルハンターだったーーー。本作品は一夏がかのデビルハンターの弟子だったらという内容です。

ＭＩＳＳＩＯＮ１　学園への扉を開け（前書き）

この小説は作者の自己満足を満たすため、ただそれだけのために書かれた二次創作です。過度な期待はするだけ無駄な作者もびっくりの超☆低クオリティです。二次創作が無理だというおかたは、今すぐブラウザバックをお勧めします。

ＭＩＳＳＩＯＮ１　学園への扉を開け

それは、幼いときの記憶。自分という人間を構成する、原初の風景。
誰かを守る力を欲した自分を、闇から掬い上げたひと。あの、血が燃えるように紅い、真紅のコートを纏う銀髪の半人半魔は、あのときなんと言ったのだろう。――

妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～
ＭＩＳＳＩＯＮ　１　学園への扉を開け

突然だが、あなたは過去に戻って人生を、行事を、選択をやり直したいと思ったことはないだろうか？
おそらくどんな崇高な人間でも、それがたとえ聖人でさえ、生きている以上１度は必ずそんな都合のよい妄想を、したことがあるんじゃなかろうか。それは、例えば高校や大学の選択だったり、もっと細かく言えばあのときこうしていればよかった、とか。かくいう自分も、今できれば１週間程度過去に戻り、殴ってでも、一最悪失神させてでも、あの軽率な行動を阻止させたい。それが駄目ならせめて、事前調査をしっかりさせて、迷うなんて選択肢を消してしまいたい。が、過ぎ去ってしまったことになにをしようが後悔しようが、戻れないのが人生である。俺ー織斑　一夏は察せられないように辺りを見回すと、今一度大きなため息を、心の中でついた。学校の教室、辺り一面見渡す限り、女。そう、此処ＩＳ学園は、俺が入学するまで完全無欠、他に類を見ない完全な女子高だった。
どうしてこうなった。
師匠、助けてくださいと心の中で叫ぶが心の中の師匠はいかにもアメリカ人然とした「ＨＡＨＡＨＡ」という笑い方をしながらピザを頬張っているだけだった。、、、あー、そういえばこういう人だ

ったよこの人。でもそれでもいいッ！！あの薄汚れた事務所へ帰りたい！！そして大掃除したい！！！と一夏の思考がおかしな方向へヒートアップしそうになる寸前、担任の先生一確か山田先生といったか、の声で正気に戻る。

「、、ん、織斑くんっ！！」

「は、はい、なんでしょうか山田先生」

慌てて視線を声のした方へ目をやると、そこには今にも泣き出しそうな山田先生の姿が。聞けば、あいうえお順でいけば次は君、つまるところ自己紹介をしろということだった。正直嫌だ。もう帰りたいという弱気な考えが脳裏をよぎるが、それはそれ。自分を鍛えてくれた師匠の顔にまで泥を塗ることになると（注：なりません）考えると、決意した。ええい、ままよ！！

「織斑　一夏です。宜しくお願いします。」

、、、言えた。しかし、まわりの視線がそれを許さなかった。即ち、

「もっとなんかしゃべれよ。」と。

仕方ない。ここまできたら言うしかない。

「特技はスポーツ全般、特に剣を扱うものとか。あ、あと家事も得意です。大体のことは自分で出来ます。なにせ1人しかいない男なので、同じクラスの皆さんには多少迷惑をかけることになると思いますが、どうぞよろしくお願いします。」

ついに羞恥心が振り切ってしまったため、一夏は営業用のスマイルを浮かべていた。色々と限界である。しかし、そんな窮地こそが彼を強くした。所謂、開き直りである。と、そんな彼の内心の葛藤とは無関係に、教室の前の扉がひらいた。

つづく。

ＭＩＳＳＩＯＮ１　学園への扉を開け（後書き）

なんていうか、すまんかった。期待して読んでくれた人がいたのなら、本当にごめんなさい。次はもっとがんばるから！、、あ、やめて、石投げないで。本当にごめんなさい！！！

ＭＩＳＳＩＯＮ２　挑戦に応えよ（前書き）

やっちまったぜひゃっほー第二弾。注意！この作品は、ファンフィクションです。そういうものに嫌悪感を抱かれる方は大人しくブラウザバックでお戻り下さい。

ＭＩＳＳＩＯＮ２　挑戦に応えよ

かはっ、と。自分の吐血音で一夏の精神は再起動した。視界が赤く、紅く染まる。身体はとうの昔に限界を越えており、こうして意識を保っていること自体、奇跡だ。

ー限界だ。そう一夏は思った。やはり自分程度が、姉を守ろうとしてること自体、間違いなんじゃなかろうか。普段の彼なら絶対に考えない、弱気な考えが精神を蝕む。そうして一夏が諦めてしまおうかと考え始めたとき、彼をここまで追い込み、沈黙を保っていた師匠が一夏に言った。

「坊や、お前が力を求めた理由はなんだ？それとも、俺が軽く撫でてやった程度で忘れちまうくらい、どうでもいい理由だったのか？」

ーそんなことはない。あんな無力感をまた味うくらいなら、一夏はきっと死を選ぶだろう。さっきまでの諦観は、師匠の言葉で何処かへ行ってしまった。心の中で、再び力への渇望が熱を持ち出す。一夏は這々の体でなんとか体を起こすと、師匠に対して拳を構えた。

「もう一本、お願いします。」そんな一夏の姿を見てニヤリと微笑む師匠。

「さあ、掛かってきな。俺に触れることが出来たら、今日は終りにしてやる。」

サラッと死刑宣告をする師匠。だがしかし、今更そんなことを言ったって、一夏の心は砕けなかった。思い切って間合いを詰める一夏。都合、本日５０　回目の一方的な暴力が始まった。

妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～？？　？　？　？

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

？　？　ＭＩＳＳＩＯＮ２　挑発に応えよ

？ガラガラと。教室の前方の扉が開いた。正確にはガラガラという

よりはウィーンという感じなのだが、問題はそこでは無い。そんなことは些事である。そう、問題は入って来た人物の方だった。驚きの余りあっ、という声が出そうになって、一夏はなんとか漏れでそう声を飲み込んだ。

なんと、そこにいたのはこの世に一人しか居ない一夏の肉親、織斑千冬その人だった。　？何故、此処に居るんだろう。耳に山田先生と姉貴の会話が入ってくる。曰く、会議が長引いたとか、担任がどうとか。どうやら、山田先生は副担任らしい。ということは、もしかしなくても姉貴が担任の先生になるのか？うん、どうやらそうっぽい。

ーと、俺がぼうっとしている内に、姉貴はハートマン軍曹もかくやという鬼教官的な自己紹介兼方針的なことを言い終わっていた。おいおい、そんな自己紹介で大丈夫か？と内心で姉貴を心配している俺に、大丈夫だ、問題無い。と言わんばかりにクラスの中が黄色い歓声で一色になった。　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

「キャーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

そうかい、そいつはごくろうさん。？

「あの千冬様にご指導いただけるなんてうれしいです！」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

喧しい。あ、いや、姦しいか。

「・・・・・・・・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。関心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

相変わらずクールな軍曹、もとい姉貴。気持ちはよくわかるが、この暴徒（本気でそう思う、このリミッターの外れ方を見ると。）に何をいっても、火にガソリンを注ぐだけなんじゃと一夏は思ったが、彼の予想は見事に当たっていた。

「きゃあああああっ！お姉さま！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」？
駄目だ、こりゃ。しかし、マズイ。これでもし、俺と姉貴が姉弟だとばれると、更に過熱する恐れがある。頼むから気付かないでくれよと祈るばかりであった一夏だったが、その祈りが届くことは無かった。その後、勘の良い女子による織斑姉弟説が提示され、更に一悶着あったことを記しておく。まあ、語るまでもないことだろう。
？
？お忘れかもしれないが、ここは高校である。当然、授業がある。という訳で、今は授業中である。まるで教育実習生であるかのような山田先生のたどたどしさには、何か暖かい気持ちになる。
さて、気になる授業の内容だが、予習していた甲斐もあり、スラスラと頭の中に入ってくる。まあ、この程度なら予習していなかったとしてもなんとかなりそうだ。正直、頭はあまり良くは無かった俺なのだが、師匠の超厳しい修行の末に、何故か記憶術まで習得してしまっていた。
そのお陰で俺は、中学校でもトップクラスの成績を誇っていた。本当、師匠には頭が上がらない。しかし、ずば抜けているのは記憶力だけなので、授業中にしっかり話を聞いていないと、折角の記憶術も宝の持ち腐れである。などと考えている間にも授業は進んでいく。俺は黒板に書いてあることを慌ててノートに写し始めた。

「ちょっと、よろしくて？」
授業が終わり、ちょっとした休憩のときに突然話し掛けられた。そちらに目を向けると、そこにはいかにもな金髪のクラスメイト（当然、女）がいた。
、、うわ。関わりたくねぇ。そもそも今は女尊男卑が世の中のスタンダード。女の方が偉い、と心底男を見下している女も増えた。そして今俺の目の前に居る女も、傲慢さが全身から滲み出ていた。間

違いない。こいつは面倒臭いことになる。

?結論から言おう。面倒臭いことになった。キッカケはクラス代表を決めることになり、何を思ったか俺を推薦する女子が多数をしめ、あわや俺に決定しそうになった瞬間、例の金髪ロールが「異議あり?」といわんばかりに、自己推薦をはじめたのであった。はじめはクールに流せた俺だったが、次第に怒りが募り始めた。かっとなって言い返した後、即座に後悔したが、時既に遅し。何故かクラス代表の座をかけた、決闘が行われることになった。その後の一部始終を記したいと思う。

「それで、ええと、、、貴女の名前なんでしたっけ?」

俺のその素直な疑問を侮辱と受け取ったのか、彼女は顔を怒りで真っ赤にさせながら、

「私の名前はセシリア?オルコットです?自己紹介の時にそう言ったでしょう!」

と言い放った。へぇ、そうなのか。全然興味無かったからわからなかった。しかし、こう言ったら彼女は更に怒り狂うだろう。流石にこれは言えない。人間、言っていいことと悪いことがあるのだ。

「俺としては決闘は一向に構わないんだけど、ハンデはどうするんだ?」

「あら、決闘前にハンデを要求なさるの?案外、頭がまわるんですのね。そうですね、このセシリア?オルコットも鬼ではありません。泣いてどうしてもと言うなら、、、」

「いやいや、なんでそうなるんだよ。逆だろ。俺がどれくらいのハンデを受けるかってきいてるんだが。」

俺の言葉に一瞬、クラス中がシーンとなった。しかしその後、嘲笑うかのような笑いがクラスを包んでいた。あろうことか、山田先生や姉貴まで苦笑いを浮かべている。、、?俺は何か変なことを言ったのだろうか。そんな中で、先ほど再会をはたした幼馴染、箒が話しかけてきた。

「なにを寝惚けたことを言っている、一夏。女より男の方が優れているなんて、もはや過去の話だぞ。」
ああ、成る程。合点がいった。だからこいつらは、こんなにも笑っているのか。こいつらは、知らない。師匠のことを、そして俺のことを。自分の中のモノサシでしか、男を測ることが出来ない。、、、ああ、こんな侮辱は久しぶりだ。冷たい怒りが腹の底から湧き上ってくると同時に、愉快な気持ちにもなってくる。矛盾する感情。まるで交わらない、螺旋のようだ。しかし、その感情どちらもが本物だった。だから、俺は、
「いや、やっぱり俺がハンデを負うべきだ。ーじゃないと、きっと勝負にならない。まずはお前の、その捻じ曲がったモノサシを破壊してやる。」
このクソったれな世界に対して、挑戦状を叩きつけた。

ＭＩＳＳＩＯＮ２　挑戦に応えよ（後書き）

すまん。続きは今週末にでもかきたいと思います。需要はなく、供給しかありませんが。

ＭＩＳＳＩＯＮ３　力を示せ（前書き）

大幅な加筆、修正をしました。

MISSION3　力を示せ

？その日の放課後。俺は、自分の部屋で電話を掛けていた。自分一人ではなく、箒との相部屋だが。ちなみに今、箒はシャワーを浴びている。男女間の線引きってやつだ。ま、だからこそ今電話を掛けている訳なんだが。閑話休題。長いコール音の後、ようやく電話に相手が出てくれた。背筋を伸ばし、声をだす。

「あ、もしもし師匠ですか？俺です、一夏です。」

「今日は休みだ。また明日掛けてこい。」

ガチャ。電話切られた。また、あの人は相手の話も聞かずに切って。今の様子だと、電話の相手が俺だということにも気付いていまい。はあ。短い溜息をつき、またコールする。次は切らせる暇をあたえない。

「ーーーー、ーーーーー。」

「ビンゴ。引き受けた。」

まだ何も言ってないのに。このあたりも変わらない。まあ、変わる筈もないか。

「もしもし、師匠ですか？」

「ーなんだ。その声は、坊やか。紛らわしい真似しやがって。久々に合言葉ありの仕事が来たかと期待したのに。俺の希望を返しやがれ。」

理不尽なぁーっ？しかし、いつものことなので軽く流し、今までの経緯を話す。

「ーという訳なんです。」

「成る程な。それで、坊やはどうしたいんだ？」

核心をつく言葉。あくまでもストレートに。その言葉に、俺はー

「勝ちたいです。完膚なきまでに圧倒的な力の差を見せ付けたい。ーなので、武器を送ってくれませんか？」

こちらも素直な気持ちを吐露した。

「ははっ！言うようになったな坊やも。これでもしわかりませんとでも言ったらどうしてやろうかと思ってたところだ。ーただし、やるからには2つ、言うことを聞いてもらう。一つ、力に呑み込まれるな。2つ、相手を出来るだけ傷つけるな。三つ、やるからには絶対に勝て。まあ、最後についてはは心配はしちゃいないがな。素手のお前でも、余裕は無いが勝てる相手だ。ーん？三つになっちまったな。まあいいか。とりあえず、武器は前お前にやったやつでいいな？ーじゃ、まあ頑張れよ。」

「はい、頑張ります。また、近い内に顔みせにいきますね。それでは、そのときに。」

ぷつっと、通話を切り携帯をしまう。知らず、ふーっと安堵の溜息をつく。これで、最大の懸念は払拭された。あとは、自分の決めた道を貫くだけだ。ついては日課を済ましておくかと、俺は昼休みの内に申請しておいたアリーナへむかった。

妄想IS～もし一夏があの人の弟子だったら～　？　？　？　？

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

？　？　MISSION3　力を示せ

？ついにきた、決闘当日。昨日届いたばかりのかなり大きめのアタッシュケースを引きづりながら、俺と箒は選手控え室に向かう。道中、そのケースに入っているのはなにかと箒に尋ねられたりしたが、誤魔化した。

どうせ説明したって分かりはしないのだから、説明するだけ無駄なのだ。

？と、そうこうしてるうちに控え室に到着した。俺が控え室に入ろうとした途端、中から扉が開いた。そこにいたのは、

「、、、山田先生？こんなところでなにしてるんですか？」

そう。何故か山田先生がいた。

先生は何故か慌てた様子で何処かへ向かおうとしていたのだが、俺を見るなり落ち着いたようで、ふーっと息を吐いた。
「織斑君来てたんですね、良かった。今から探しにいくところだったんです。さあ、時間が無いから入って。」
？俺になんの用があったんだろうか。疑問に思いながら控え室に入った瞬間それが目に入り、俺の疑問は氷解した。部屋の中央に鎮座する、白い鎧。
「これは、」
「はい。織斑君専用ＩＳ、『白式』です。時間が無いので、早く装着してくださいね。」
俺専用の、ＩＳ。正直、かなり心引かれた。触れたがる気持ちを押さえ込む。今はまだ、これに触れる訳にはいかない。と、いつまでたっても動こうとしない俺に痺れをきらしたのか、意外な人物が俺に声をかけた。
「織斑、何をしている。はやくしろ。ぶっつけ本番なのだから、少しでも長く、、」
姉貴だった。俺は何故姉貴がここにいるかについては突っ込まないことにして、話を途中で遮った。
「いえ、必要無いです。織斑先生。ー俺には、これがありますから。」
いいながら、俺はケースを開く。中に入っていたのは、黒いコート、２対の拳銃。そして、
「、、アラストル」
一振の、長剣だった。
雷刃魔神アラストル。それが、この長剣ー正確には悪魔だがーの名前である。本当の主は師匠だが、色々あり今は俺が仮の主となっている。形は師匠が使用していたときとはまた違う形をしている。まあ、そんなことはどうでもいい。俺は素早くコートに腕を通し、銃のホルスターを装着する。２丁拳銃をクルクルと両手で回しつつ、ホルスターへ格納する。師匠の真似だ。最後に、アラストルを放り

投げ、背中に固定する。自分でやっといてなんだが、いつもどうやって固定しているんだろうか？疑問である。まあいい。準備完了。あとは進むだけである。と、ここにきて制止の声か掛かった。
「一夏、お前は誰と戦うつもりなんだ？」
と、箒が問いかけてくる。僅かな苛立ちを感じる。
「そりゃ、セシリア嬢とだろ。それ以外誰がいるんだ？」
なんでそんな質問するんだ？きっと俺の顔にはそう書いてあっただろう。
「私が言いたいのはそういうことではない。生身で、ＩＳに挑むつもりなのかと、そう聞いているのだ。」
生身で～の辺りにやけに力がこもってるのは気のせいだろうか。
「勿論。」
そういった瞬間、箒の感情が爆発した。
「そうじゃないっ！死ぬ気なのか、貴様はっ！」
おーおー、珍しく取り乱してんな、箒のやつ。しかしどうやら取り乱しているのは箒だけではないらしく、山田先生と姉貴までもが俺に制止に掛かった。
？俺は、それを片手で制止しつつ、こう言い放つ。
「別に自殺願望なんか持ち合わせちゃいない。それに言っただろ、最初にハンデだって。いいから、黙って見てろ。」
　呆然としてる三人を尻目に俺はアリーナに飛び降りる。慌てて止めようとするが、もう遅い。俺の身体は落下を始めていた。

？ずどむ。おおよそ人間が着地したとは思えない音を立てながら着地する。意外に高かった、というのが感想だ。普通の人なら、大怪我は免れ無いだろう。まあ、別に俺は平気だけど。それはともかく、決闘相手のセシリア嬢は既に来ていた。
「まずは逃げずに来たことを、褒めてさしあげましょう。」
宙に浮きつつ、偉そうにセシリアはそう言い切った。
？相変わらず無駄に偉そうだな、こいつ。その言葉に俺は軽口で返

した。
「そいつはどーも。道が混んでてな、ちっとばかし遅くなっちまった。ま、そんなことは置いといて、とっとと闘ろうぜ。」
「まあ、野蛮ですのね。最後にチャンスをさしあげる予定でしたのに、残念です。」
それほど残念ではなさそうにいうセシリア。
　ちなみにこの時点で、セシリアは一夏がＩＳを装着していないことを織斑先生とのプライベートチャンネルでの会話で知っていた。ーというより見れば分かるのだがー、しかし、決闘を辞めるつもりは無かった。むしろ、千冬に「あの愚弟を死なない程度にボコボコにしろ」と有り難い言葉をいただいている。用は死ななければ何をしても良いということだ。
レーザーの威力も最低限にしてある。これなら、直撃しても死ないだろう。今はスポーツなのだ。精々、三ヶ月以上の入院が必要になるくらいだろう。
?セシリアは、自分の勝ちを確信していた。少なくとも、一夏が勝つと思ってる人間は、一夏以外この学園にはいなかった。

?会話が終わった後、先に動いたのはセシリアだった。彼女は、一夏と会話を交わしてる間にも、すぐ動けるように構えていた。威力が最低限に抑えられたレーザーを放つ。直撃。あっけなく、決闘は一夏の敗北で終わる。筈、だった。しかし。
「ははっ、中々ホットだな」
そこにいたのは、無傷の一夏の姿だった。
唖然。それはセシリアだけではなく、アリーナ全体が静寂で覆われていた。しかし、当の本人である一夏は気にもせずにセシリアを挑発していた。
「Ｈｅｙ?Ｗｈａｔ'ｓ　ｕｐ?」
腰を屈め、まるで犬を呼ぶかのように手を叩いている。

ぶちっ。何かが切れる音がした。

ーそして、決闘が始まった。

?スコールと見間違える程のビームの雨が一夏を襲う。
?既に、セシリアは手加減のことなど綺麗に忘れていた。放たれる攻撃は生身の一夏にとって、全てが必殺。
?それは、一夏をフルボッコにしろと命じた千冬でさえ制止しかけたほどだった。?
?しかし、それには及ばなかった。
?何故か。一夏に一発も当たらないからだ。
?一夏はスコールのように降り注ぐそれを、全て回避していた。それどころか回避の途中途中に動きを止め、挑発を行っていた。

「Ｃｏｍｅ　ａｎｄ　ｇｅｔ　ｍｅ．」

ー捕まえてみな。
そう言い放ち、わざわざ自ら隙を晒しているのにも関わらず、未だに一夏は無傷だった。そして、自分よりも遥かに格下の存在である筈の男に、一発も当てられないセシリアは、フラストレーションを溜めていた。しかも、相手はＩＳすら装着していない生身の筈なのに。
?セシリアがレーザーを放ち、それを一夏が避ける。決闘は、膠着状態に陥った。

?動きが合ったのはそれから、１５分ほど経ってからだった。

それまで回避を常時続けていた　一夏が突然、動きを止めたのだ。

?それを警戒し、上空で静止するセシリア。一旦、攻撃を中止し、訝しげに一夏に問いかける。
「なんですの？いきなり動きを止めるなんて。まさかとは思いますが、ギブアップですか？まあ土下座して謝るなら、赦してあげてもよろしくてよ？」？

ギブアップするつもりなのか。なんにせよ、このまま怪我人が出ずにこの決闘が終わるのなら良かったと、一夏を除くアリーナの全ての者が胸を撫で下ろした。
?が、しかし。

「いや、勘違いしているところ非常に申し訳ないんだが、」

一夏は申し訳なさそうにそう間を置いて

「もうハンデは良いか？」

こう言い放った。

「ハ、ハンデ、、、？」

?呆然とオウム返しに呟くセシリア。もっとも、それはアリーナにいる全員が同じようなリアクションだった。
「ハンデとは、どういうことですの？」
?混乱に陥りながらも、懸命に質問を紡ぐセシリア。
?それは、その場にいる者全ての疑問を含んだ質問だった。
「どういうことって、そのまんまの意味だが？ほら、俺が一度でもお前に攻撃したか？してないだろ？」
確かに。一夏はセシリアの猛攻に対して、避けることしかしなかっ

た。
しかもそれは、挑発を行える程の余裕を伴ったものだった。
それが事実であることを、セシリアは心の中で認めてしまった。
「という訳で、俺は今からお前に攻撃を始める。
別に、今降参するならそれでも良いぜ？」
「ハッタリですわ。貴方こそ、今降参した方が恥をかかなくて済みますわよ？」
そう言い返して虚勢をはるセシリアに、笑いかける一夏。

「継続で構わないんだな？」
それじゃあと、２丁拳銃を構える一夏。
「Ｌｅｔ' ｓ　ｒｏｃｋ！！」
派手に行くぜといい、セシリアに銃弾を放つ一夏。そんな一夏に対する迎撃態勢をとるセシリア。

こうして、本当の決闘が始まった。

？もっとも、セシリアの戦法は変わらない。上空から自身の持つレーザーライフルと、ピットによる集中攻撃。セシリア自身が宙にいるため、負けることはない戦法。このまま、ジワジワと体力を削っていき一夏の降参を待つつもりだった。

？しかしそんな目論見は、すぐに崩れ去ることになる。

？降り注ぐレーザーに対して、２丁拳銃を乱射する一夏。勿論、ただの拳銃ならばなんの意味も成さない。しかし、一夏の持つ２丁拳銃は彼の師匠であるダンテが自らのエボニー＆アイボリーの縮小コピー品として、一夏の為に製作したものだ。エボアボとほぼ同性能を持つので、無論、チャージショットを撃つことが可能である。
？レーザーの雨を、チャージショットで相殺する一夏。その後２丁

拳銃をホルスターにしまい、背中のアラストルを水平に構える。
「Ｆｒｅｅｚｅ！」
そう叫び、アラストルを高速回転させながらセシリアに投げつける。
「なっ？」
一瞬動揺するセシリアだが、流石は代表候補生。すぐに冷静になり、ライフルでアラストルを弾いた。
弾いた、ハズだった。一度弾かれ、セシリアの後方に飛んで行ったアラストルが、込められた魔力によって再度セシリアに切りかかる。

この技の名を、ラウンドトリップと云う。

それも一度ではない。まるで剣そのものが生きているかのように、何度も何度もセシリアのシールドエネルギーを削り取る。
「きゃあ！」
？余りにも想定外の状況に、悲鳴をあげなす術もなく滞空するだけのセシリア。攻撃をすることすらままならないでいた。
？そしてそんな隙を見逃してやるほど、一夏は甘くなかった。

残像を残しつつ姿を消し、一瞬で敵の上空に移動する技ーエアトリックを発動させ、セシリアの真上に移動する。そして未だにラウンドトリップに蹂躙されているセシリアからアラストルを戻し、一夏はこう言った。
？弾丸の雨を浴びてみるかい、と。
？直後、激しい銃弾の雨がセシリアを襲う。
？一夏はセシリアの上空で逆さまになり、回転しながら２丁拳銃を真下に向かって連射していた。

銃技、レインストーム。

しかし、セシリアもただやられてばかりではない。レインストームが止まり、後は落下するしか出来ず、身動きがとれない一夏の隙を見逃さずに、今まで奥の手として隠してきた残り二つの『弾道型』のピットを即時展開、発射する。
「いくら貴方でも、空中で方向転換は不可能でしょう。私の勝ちですわ。」
勝ち誇るセシリア。チェックメイトを宣言する。

「一夏ッ？」
今まで心配していながらも必死に声を抑えていた箒だったが、
？一夏の生命の危機に、思わず声をあげてしまう。

その声を聞いてか聞かずか、一夏はふと優しく微笑む。まるで、誰かを安心させるかのように。
？そして、ミサイルが一夏に直撃するかと思われた瞬間。
一夏は、赤い魔方陣のようなものを背中に展開させ、空中で水平方向に移動し、ミサイルを回避した。

「「「、、、はぁっ？」」」

一夏が回避した瞬間を全部目撃したのは、三人だけだった。
セシリアと、千冬と、箒だけである。その三人が、異口同音に驚愕の言葉を発する。
？
？が、そんな三人の疑問が解決される訳も無く、一夏は次の攻撃に移る。

急降下しながらアラストルによる一撃を繰り出す。
ところで、この兜割りという技は、その高度によって威力がかなり増減される。

そして、今回のこの技の発動地点は地上からおよそ３０ｍほどである。
つまり、この一撃には、最高クラスの威力が込められているということだ。

その一撃は、地上すれすれを浮揚するセシリアに直撃し、勢いを決して殺すことなく、そのまま地面に叩きつけられた。
空中で一撃。地面に叩きつけつけられ、後方に吹き飛ぶセシリア。
衝撃から主を守るため、ブルー・ティアーズが絶対防御を発動させたので、セシリアの残りのシールドエネルギーは僅かになっていた。
壁に背を預け、　つい先程自分が叩きつけられた地点に目を向けるセシリア。
どれほどの衝撃だったのか、辺りには土煙がたちこめており一夏の姿は視認出来ない。
視認、出来ない、、？
不味い。急いでこの場を離れなければ。遅蒔きながら回避行動をとろうとするが、時既に遅し。
「”Ｄｒｉｖｅ！　Ｏｎｅ！　Ｔｗｏ！”」
一夏の声が聞こえた瞬間、紅い衝撃波が三波、セシリアを襲う。

？兜割りの途中から、アラストルに込めていた魔力を衝撃波と共に射出する。
「”Ｄｒｉｖｅ！　Ｏｎｅ！　Ｔｗｏ！”」
土煙を切り裂きつつ、セシリアに肉薄するドライブ。しかし一夏は、当てようとしてドライブを放ったのでは無い。
セシリアの動きを制限する為、空中にも左右にも回避出来ないようにするため、しゃがめば回避できるようにわざと下を開けてドライブを放ったのだ。
そして一夏の目論見通り、体を曲げこれを回避するセシリア。
視認したと同時に、高速で前進しながら放つ突きースティンガーで

セシリアとの距離を詰める。そして、スティンガーからの派生技であるミリオンスタッブでセシリアの装甲を、シールドエネルギーを削る。
？セシリアのシールドエネルギーがほぼ零になったところで、トドメの突きを放つ。
「”Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ！”」
魔力が込められたアラストルが、セシリアの鼻先１ｍｍのところで止められる。

一瞬遅れ、一夏の勝利を告げるアナウンスが流れる。

決闘は、織斑一夏の勝利で終結した。

ＭＩＳＳＩＯＮ３　力を示せ（後書き）

ごめんなさい。本当にすいませんでした。セシリアが完全な噛ませキャラとなっております。いや、筆者がセシリア嫌いというけとはないですよ？ただ、ＩＳの世界観の一つである女尊男卑がかなり気に入らないだけで。むしろ、セシリアは好きです。あと、感想を書いていただけると筆者の執筆速度があがったり。、、、すいません、調子に乗りました。読んでいただいて貰うだけでまた書こうと気力が湧いてきます。こんな自己満足でかいた物ですいません。これからも、精進していきたいと思います。

ＭＩＳＳＩＯＮ４　力の意義（前書き）

前回の感想を書いてくださった方、ありがとうございました？貴重な御意見が小説に活かせるように頑張りました！これからも、感想はドンドン書いてくださいね。出来る限り小説に反映させて頂きます。本当に、感想をかいてくださった方はありがとうございました。

ＭＩＳＳＩＯＮ４　力の意義

?アリーナから控え室に戻った俺を出迎えてくれたのは、俺の勝利を祝う言葉でも労いの言葉でも無く、姉貴の鉄拳だった。
「危ねッ?」
?顔面を狙って放たれた拳を上体を横に逸らし避ける。残心を解かずにおいて正解だった。
「、、、チッ」
「今舌打ちした?舌打ちしたよね絶対?」
?何故こんな目に会わなければならないのだろうか。俺、勝ったよね?
「まあ冗談はさておき、本題に入ろうか。」
?直撃すれば気絶は免れ無い一撃をこの姉は冗談だとのたもうた。どういう神経してんだよ。
?流石に俺の弾劾するような顔に罪悪感を覚えたらしく、弁明してきた。
「いや、本当はな、お前を気絶させて身動きを取れなくしたところで尋問、、、質問する予定だったんだ。」
?いろいろとツッコミたい。気絶とか、身動きとれないとか、尋問する予定だったんだ、とか。でも、一番聞かなきゃいけないのは其処じゃない。
「俺に何を尋問する予定だったんだ?姉貴。」
?聞いてはみたものの、その質問の内容は概ね予想がついていた。、、ああ。やっぱり。姉貴の笑顔が、冷酷なそれに変わっていた。
「察しはついているようだな。それでは、遠慮なく質問することにしよう。一夏、お前はあれ程の力をどうやって手に入れた?」
予想通り。だか、どうやっても説明出来ない質問に、どうやって答えろというのか。

妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～　？　？　？　？
？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？
ＭＩＳＳＩＯＮ４　力の意義

？上辺だけ説明するのならば簡単だ。師匠ーダンテに鍛えてもらったから。それだけだ。
？しかし、それではいそうですかと納得する馬鹿もいないだろう。一体、どんな修練を積めばその領域に達することが出来るのかー。この場合、重要なのは結果ではなくその結果を生み出した過程だ。
？しかし、それを知った程度では再現出来ない。それよりも、何より信じることが出来ないだろう。俺も、実際に直面するまで半信半疑だったのだから。
？それでも真実は残酷で、奴らがーー悪魔が、この世に存在するのも真実だ。
？最も、その存在が俺と師匠を巡り合わせたのも事実だが。
？しかし、真実をありのままに伝えてもまず信じてもらえない。最悪、黄色い救急車を呼ばれることになるだろう。
？だから、今考えるべきなのは、姉貴を納得させる理由だ。
「強くなりたくて、昔から自分で体を鍛えてたんだ。いろんな格闘技を習ったり、強い人に鍛えてもらったりしたんだ。多分、そのお陰だと思う。」
よし、完璧だ。しかも、嘘は言ってない。しかし、その位で納得する程甘くはない。
「ほう、お前はたかだか格闘技を少しかじった位でＩＳ相手に生身で勝てるようになったのか、一夏。甘くみるなよ。それがどれほどのことか、達成したお前本人が１番よくわかっているだろう？」
うぐ。確かに。その程度で勝てるようなら、世界中の男達はその立場を追われるようなことにはならなかっただろう。
「それに、だ。お前が強いということは、何気無い動作で判る。しかし、お前の年齢でその実力は不可能だ。いいか、不思議なんじゃ

ない。不可能なんだ。いくら経験を積もうと、積み重ねられた年月は超えられない。なのに、お前はその領域にいる。死線を幾度も超えた、達人といわれても遜色ない高みに。、、、正直、訳がわからん。」？

？突然の告白。姉貴がそこまで俺を過剰に評価するとは思わなかった。しかし。

「、、買いかぶりすぎだぜ、姉貴。俺はそんなに強くない。」

ー確かに、死線なら数えるのが億劫になるくらい、超えてきた。

？なんせ、毎日の修行で死線を彷徨うのだ。全て投げ出して楽になろうと思ったことも、正直数えきれない。

？しかし、その度に自分が強くなりたい理由を思い出し、なんとか踏み止まってきた。だから、

「もし俺が強いってんなら、それは姉貴のお陰なんだぜ。」

？そう。全ては一夏が誘拐されたときに、助けに来てくれた千冬がいたから。あのときから、一夏の在り方は何も変わってはいない。

？助けてもらったから。今度は、自分が助け、護れるようになりたい。

？ただそれだけだ。

「もういいだろう、姉貴。疲れたから、シャワー浴びて寝たいんだが。」

目を丸くして驚いている姉貴に、そう声をかける。

「そ、そうか。」

？なにをきょどってるんだ？と、いうか。

「なあ、姉貴。」

「ゴホンッ。なんだ？」

「着替えたいんだけど。」

意表を突かれたかのような表情を一瞬した後、姉貴は無言で出て行った。なんだったんだろうか。ともかく、疲れたというのは本当だった。今更になって、桁違いの疲労が俺を襲っていた。

？姉貴の手前見栄を張っていたが、流石に限界だ。ノロノロとした

動作で着替え、武器をケースに仕舞う。先に2丁拳銃をしまったあと、アラストルを眼前に構える。
「ありがとう、アラストル。お前のお陰で勝てたよ。」
『当たり前だ。あの程度の者に、俺を持っていて負ける筈が無い。』
「しかし、すまないな。久々に振るったのが俺で。」
『なあに、貴様とて仮とは言え主。それに、最近マスターは俺を使いたがらないからな。前にマスターに使われたのはいつだったか、、、』
マズイ。このままだと話が長くなる。いつもならアラストルの愚痴に付き合っても良いが、今は流石に勘弁して欲しい。
「はは、、まあ、ありがとう。また使うから。」
そう言って、有無を言わさずにケースを閉じる。まだ何か言ってるようで、ブツブツとケースの中から声が聞こえるが、無視。
「さてと。帰って寝ますか。」
?俺はケースを引きずって部屋まで帰り、シャワーを浴びた後ベットに倒れ込むように寝てしまった。

?コン、コン、コン。控えめなノックの音で俺の意識は覚醒した。どうやら客が来たらしい。　?　?
?俺は、色濃く残る眠気を頭を振って払い、ドアを開けた。?
「はい、どちらさん?」
そこには、大凡想像出来ない人物がいた。
「セシリアさん?」
そう。何故かそこには、セシリアがいた。
「こんばんは、一夏さん。少々、あがらせてもらってもよろしいでしょうか?」
「あ、ああ。別に構わないが。」
「では、失礼いたします。」
そう言ってあがってくるセシリア。なんの用できたのだろうか。

「お茶を入れるから、そこに座っといてくれ。」
「どうぞ、お構いなく。すぐに、済む用事ですから。」
「そうか。分かった。」
とはいえ茶を出さない訳にもいくまい。手早くお茶を入れて、お盆に載せて持って行く。
「はいこれ、粗茶。」
「まあ、ありがとうございます。」
自分の分のお茶を啜り、一息つく。
「それで、セシリアさんはどうしてここに？」
さっき決闘した仲だ。仲良くしに来たとは思えない。
「セシリアと、呼び捨てで構いませんわ。」
前言撤回。なんか仲良くなれそうな雰囲気だ。
「分かった、セシリア。それで、どうしてここに？」
最初の疑問にまだ答えてもらって無い。
「それは、、、貴方に謝りたくて来たんです。」
なん、、、だと？吃驚している俺に対して言葉を紡ぐセシリア。
「決闘前、私は貴方を酷く侮辱しました。今更無かったことには出来ませんが、せめて謝罪だけでもと思いまして。ー本当に、ごめんなさい。」
そうして、セシリアは俺に頭を下げた。
「セシリア、顔をあげてくれ。確かに、酷いことは言われたが、今謝ってくれたじゃないか。なら、俺はそれで良い。」
別に気にしちゃいない、ということをアピールする。
「でも、、、」
気まずそうに、もじもじするセシリア。だけど。
「俺がいいって言ってるんだ。ほら、仲直りの握手しようぜ。
それとも、俺と握手するのはイヤか？」
ばって顔をあげるセシリア。何故かその頬は紅潮している。
「ッ？イヤじゃ、、、ありませんわ。」
おずおずと、俺の差し出した右手を握るセシリア。

「じゃ、これでお互いに過去の話は水に流すということで。改めてこれから宜しく、セシリア。」
「ええ、宜しくお願いします、一夏さん。」
そのまま、しっかりと握手を交わし、お互いに正面から見つめ合う。と、何故かまたセシリアは俯いてしまった。耳まで真っ赤になっている。
「ど、どうしたセシリア？熱でもあるのか？」
俺は慌てて、空いてる左手でセシリアの額に手を当てる。
？何故か、また赤くなった気がする。が。
「熱は無いみたいだな。」
風邪では無いようだ。ほっと胸を撫で下ろす。
？最初、俺の左手がひんやりとして心地良いのか「あっ、、」という声を漏らして気持ち良さそうに目を細めていたセシリアだったが、我に返ったのか急に握りっぱなしだった右手を振りほどき、凄い勢いで出て行ってしまった。
？、、、。あー、なんというか。
「折角仲良くなれたと思ったのに、嫌われたのか、、、？」
？ポツリと漏らした独り言に答える者がいる筈もなく、ただ虚しく部屋に響くだけだった。

？？　？　？　？　？　？　？　？　おまけ。
？部屋の真ん中で軽く落ちこんでいた俺に、タイミングの神様は追い討ちをかけてきた。
部屋のドアがバーンと、まるでクラッカーを鳴らしたかのように景気の良い音をたてて開いた。そこにいたのは、

「や、夜叉、、？」
夜叉のような強烈なオーラを放つ箒だった。わ、わからん。なにをそんなに怒ってるんだ？
「ーーー、ーー。」
なにごとかを呟いている。こ、怖い。しかし、怯むわけにはいかん！
「あのー、ホウキサン？ナニヲソンナニオコッテラッシャルンデスカ？」
前言撤回。思わず片言になるぐらい怖えよ、この子。
「女の敵」
「は？」
いきなりの敵呼ばわりに、聞き返してしまう。
「先程、セシリアがこの部屋から真っ赤になって出て行ったところを見た。しかも、すれ違う寸前に顔を良くみると涙目になっていた。、、、何か言い残すことはあるか？」
ちょっ、処刑確定すか！
「ち、違うぞ箒。それは誤解、、、」
「問答無用？」
言い残すことはないかって聞いたじゃん。いや、死ぬ気はないけどねっ！だがこの空気はヤバイ。これは、、、本気の殺意か。
？無言のまま振るわれる木刀を、なんとかかわす。
「避けるなッ！」
いや、無理だろ。流石に当たったら痛いじゃ済まないじゃないか。戦闘中でも無いのにロイヤルガード使いたくないし。
？今日は散々だ。決闘したり、幼馴染に木刀ふりまわされたり碌なことが無い。
「はあ。なんていうか、俺って」
不幸だよなあ、なんてことを考えながら木刀を避ける。まだまだ、箒の怒りは続きそうだ。

つづく。

ＭＩＳＳＩＯＮ４　力の意義（後書き）

セシリアさん、デレる。今回は、これが書きたかっただけです。次回に御期待ください。

ＭＩＳＳＩＯＮ５　新たなる力（前書き）

ここまで来るといろいろな改変が入ってきます。まあ、最初からなんですが。たとえば一夏のＩＳ装着シーンとかＩＳの仕様とか。多分ほかの生徒が見たら吃驚するどころの騒ぎではないと思います。決闘の件といい、うちの一夏は原作とは違う意味でトラブルメーカーです。改変というより改悪ですが、それでもいいやという方はゆっくりお楽しみください。

ＭＩＳＳＩＯＮ５　新たなる力

決闘から二日後。場所、第一アリーナ。時間帯、放課後。天候、晴天。

何故俺が一人でこんな場所にいるか。それは、決闘のときに俺がＩＳを装着しなかったからだ。つまり、俺専用のＩＳである『白式』を今回こそ装着させ、身体に慣れさせることが目的なのだ。

しかし、今この場に俺一人しかいないのはどういったことだろう。ＩＳをまだ二回しか起動させたことがない素人に、まさか一人で起動・装着しろというのか。

こういう場合ふつう、起動の仕方とか装着の方法とか誰かから教えて貰いながらするんじゃないか？とは思うものの、俺一人しかいない以上うだうだ考えても仕方がない。師匠も言っていた。大事なのはその瞬間ごとの決断だと。よし、さっさとやってしまおう。

ーちなみに、『来ていない』ではなく、『そんなことをしている暇はない』が正解だ。そしてその原因は他の誰でもない一夏自身にある。そう、先日の決闘の件である。学園の先生方は一夏がこうしている今でも、決闘の仔細が各国に出回らないよう奔走している。ほかの学園生は事の重大さに気付いているため、知らないのは一夏本人だけである。ー

妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～

ＭＩＳＳＩＯＮ５　新たなる力

アリーナの丁度真ん中ぐらいに白式は鎮座していた。見た目は前回と変わっていない。まあ、当然なのだが。１５ｍぐらい離れた距離から、一夏は白式に左手をかざした。この行為にさして深い意味

は無い。強いていうなら、師匠であるダンテが以前こうやって魔具を起動させていたのを真似ただけだ。
しかし、効果はあったようだ。白式が眩い光の珠となって、一夏の左手に吸い込まれていった。瞬間、一夏の全身は白い光で覆われた。耐え切れず、瞼を閉じる。

白い光が収まり、一夏は閉じていた瞼を開く。そして、自分の全身を見た。
「おおっ！」
自分の全身を覆う、白い鎧。最初、一夏はそう感じた。しかし、装着したと思った次の瞬間に、白い鎧はその輪郭を崩し始めた。
「おいおい、マジかよ」
失敗か。一夏の脳裏に嫌な二文字が浮かぶ。だが、そうではなかったようだ。右手に、白い粒子のようなものが纏わりついている。それは一際強く光ったかと思えば、次の瞬間には純白のガントレットになっていた。
「これは、待機状態ってやつか？」
右手に装着された白いガントレット－白式に話しかけるように呟いてみたが、返事は無かった。
「そりゃそうか。ま、もう一回ぐらい展開してみるか。」
右手の白式を顔に翳しながら、先ほどの白式を思い浮かべる。再び、白い光が一夏の全身を覆う。二回目の展開は速かった。刹那、一夏は白式の展開に成功していた。が。
「どう見ても、さっきのヤツと違うよな、これ、、、」
白式の外見は一切が変わっていた。まず、非常にコンパクトになっている。見える装甲は両手と両足を覆う具足のようなものと、それと背部に円盤？のような装置があるだけだ。というより、この外見は、、、
「、、、ギルガメス？」
そう言った通り、質感と色合い、細部こそ違うものの、その外見は

衝撃鋼ギルガメスによく似ていた。純白の素地に、蒼いラインが複数刻まれており、一夏の魔力に鳴動しているのか蒼いラインが脈打つように光っている。

と、そのとき。

ガラスが割れるような音が辺りに鳴り響いた。反射的に宙へ跳ぶ一夏。先程まで一夏の立っていた場所に、次々と死神の鎌が突き刺さっていく。そこに現れたのは、合計7体の下級悪魔ー7ヘルズだった。

「おいおい、随分都合良く現れてくれるじゃないか。わざわざ新しい装備の実験台に来てくれるなんて、悪魔ってのはよっぽど暇なんだな！」

言いつつ、飛行していた体勢から鋭い跳び蹴りーフルハウスを一番身近なヘルズに叩き込む。それほど威力を込めたつもりはなかったが、一撃で砕け散るヘルズ。次いで、攻撃のモーションに入ったヘルズをドローでかわし、ストレイトを当てる。ストレイトを喰らったヘルズは吹き飛び、後ろにいた3体のヘルズを巻き込んで消滅した。

どうやら、この白式はかなり高い攻撃力をほこるようだ。さらに、今までの攻撃は溜め、魔力を一切使っていない。両方から迫るヘルズにかなり手加減した回し蹴りを放ち、吹っ飛ばして距離をとる。右手を地面に向かって振り上げ、そのまま力を溜める。懲りもせずに肉薄してきたヘルズ2体の攻撃が一夏に当たると思われた次の瞬間、一夏は溜めていた力を地面に解放した。

ショック。これが技の名前だが、それはまさに衝撃だった。叩き付けた拳による衝撃波によって攻撃するのだが、この衝撃波によってヘルズ2体は瞬時に消滅。そして地面にも、直径１５ｍ程のクレーターをつくってしまった。

「、、、やり過ぎた。」
おそらく、この白式は本家ギルガメスにも引けをとらない威力だろう。が、いかんせんやりすぎた。見つかってとやかく言われるのも面倒なので、適当に地面を均しておく。

「こんなもんか。」
白式を待機状態に戻し、アリーナからでる一夏。白式という強力な武器を手に入れた一夏は、子供のような上機嫌な笑顔で自室へと戻った。

つづく。

ＭＩＳＳＩＯＮ５　新たなる力（後書き）

今回は短めでした。次は長くしたいと思います。

ＭＩＳＳＩＯＮ６　ＩＳ（前書き）

前回に引き続き家訓：とりあえず試せの巻。たまにはこんなのも良いかな～と試験的に導入してみました。

MISSION6　IS

?翌日。朝のＳＨＲの時間に、山田先生によって一組の代表が俺になったことが発表された。

嬉しくない。

?正直に心中を吐露すると、いや本当に、セシリアには申し訳ないが嬉しくない。

?今回の決闘の（俺の）目的は、セシリアに勝利することであって、クラスの代表になることでは無かったのだ。

?だからこそ、本当にクラス代表になるべきはセシリアだと、そう主張した。した、のだが。

「辞退は認めん。勝者は勝者としてその責任を果たせ。」

とは勿論姉貴からの心温まるお言葉だった。

?

「それに、この空気の流れでお前は断わることが出来るのか？ー私は出来るとは思えんが。」

?そうでした。第一、譲ること自体をセシリア本人に断わられているのだから、八方塞がりというか四面楚歌というか。

?受けざるを得ない状況になってしまった。しかし、ここまできてクラス代表にならないというのは男が廃る。よし、ここで一発所信表明でもしとくか。

「俺がやる以上目標は優勝だ。以上。」

そうだ。そうなった理由はどうであれ、やる以上は絶対に負けられ

ない。それに、負けたら師匠に会わせる顔がない。
？多少、強気の表情でそう宣言する。
きゃーーーっと、クラスの女子から声援が上がる。と言っても俺以外全員女子なのだから、殆ど全員と言っても過言ではない。
「煽るな、馬鹿者」
そういって出席簿アタックを俺に放つ姉貴。というか、別に煽ったつもりはないんだが。それより、今まで全部避けてきたので、出席簿アタックがヒットするのは何気に今回が初めてだったりする。
そして、分かったことが一つ。　？
？あの打撃はめちゃくちゃ痛い。俺が打たれた頭をさすりながら席につく頃には、姉貴は既にクラスの鎮静を終えていた。？
妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～　？　？　？　？
？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？
？　？　ＭＩＳＳＩＯＮ６　ＩＳ
「それでは、これよりＩＳにおける基本的な飛行訓練を行なう。織斑、セシリア、お前たちは前にでて手本を実施しろ。」
俺のクラス代表が決定した数日後。姉貴が言ってる通り、今はＩＳを使用した実習授業が行なわれている。？
「了解。」
「分かりましたわ。」
？俺とセシリアはそれぞれ返事をして、ＩＳを展開させる。
？一瞬、右手の白式が光ったかと思うと、次の瞬間には俺の装着は終わっていた。

?周囲から感嘆の声が聞こえるが、俺からしてみればまだまだ遅い。それに、？

「見てよ、あれ、、」
「うん、なんていうか、、」
「あれだよね、、、」

「「「なんかショボい、、」」」

?あっそ。俺自身、他のＩＳに比べると白式はなんというか、洗練されすぎている気がする。なにせ、甲手と具足（のようなもの）しかないのだ。
?これを製作した所によれば、本来あり得ない展開らしい。詳しい理由は不明。どうせ俺が男だからとかそんな理由だろうと半ば適当に言ったら、本当にそんな診察結果だった。
?どうなってんだよ、全く。
?そんなこんなで俺の白式に対する世間の目は果てしなく冷たかったのだが、俺自身はこの白式の形態は嫌いじゃ無かった。
?むしろ、気に入ってすらいた。何故か。それは、白式が俺の戦闘スタイルに合致しているからだ。本来ＩＳにはＩＳの戦い方があるのだろうが、俺に合うことはないだろう。それ程までに、師匠ーダンテの教えは俺に強く根付いていた。

?それに、見かけがシンプルだからと云ってＩＳとしての機能が削られているということも無い。つまり、兵器としての機能はそのままで、見かけだけがコンパクトかつシンプルになっただけだ。なんだ。良いことじゃん。

?そうしている内に、セシリアの方も展開を終えていた。俺が壊した様々な部分の修復も終わっており、すっかり元通りになっている。

「よし、飛べ。」

言われて、先に飛んだのはセシリアだった。わざと一瞬遅れ、俺も飛ぶ。

理由は簡単。追い抜けるか試してみたかっただけだ。

？中空でセシリアを追い抜き、上空で急停止する。動作自体は昨日習っていた為、比較的簡単だった。

？遅れてきたセシリアが、俺に話しかけてきた。

「昨日習ったばかりとは思えない上達ぶりですわね、一夏さん。」

優しげな微笑みとともに褒められた。素直に嬉しい。が、セシリアってこんな柔和な笑い方する女だったっけ。険のとれたセシリアの笑顔は、俺の胸を高鳴らせた。セシリア、恐ろしい子、、、！

などと心の中でふざけながら、動揺を悟られないように、出来るだけ平然と返す。

「いや、白式の性能が良いだけさ。」

「ご謙遜を。照れ屋さんなんですのね。」

あははうふふと笑い合う。そこには以前あった敵意や悪意は一切ない。仲の良い男女のようなイイ雰囲気が、そこには漂っていた。しかし。

「一夏っ！いつまでそんなとこにいる！早く降りて来いっ！」

耳をつんざく怒鳴り声。下を見たら、インカムを箒に奪われた山田先生がオロオロしている。

ー箒のヤツ、ちったあ先生を慮ってやれよ。山田先生涙目じゃねーか。

ちなみに何故見えるかというかと以下略。セシリアが優等生の知識を俺に発揮してくれた。

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から１０ｃｍだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

俺にそう言って、セシリアは先に地表に向けて降下していった。

俺は、代表候補生ってのはやっぱり凄いんだなと感心する。我ながらよく勝てたもんだ。
下から歓声が聞こえる。どうやら、完全停止も難なくクリアしたらしい。ーさて、俺も行くか。
地面に向かって凄い勢いで降下する。こうやって空を飛ぶのは、やはり気持ちが良い。
っと、もうそろそろ地表だ。
昨日セシリアと箒が言っていた完全停止の要領を思い出し、実践。
その甲斐あって、なんとか地表スレスレで停止する。一回やったことでコツを掴んだし、次はもっと上手くやれるだろう。
「よし。織斑、次は武装を展開しろ」
二人とも成功したのを確認した姉貴が、次の指示をだした。
俺は黙って姉貴に左手を振り、左手の物体を示す。俺の左手には、日本刀が握られていた。
普通の日本刀よりは長いが、ＩＳ用の装備としては若干心許ない程度の刃渡り。ゆるやかな反りがあり、刀と云うよりは太刀に近い。
そして何よりその刀の変わっている部分は、
「、、、鞘？」
そう。一夏の左手に握られた刀は、その刀身を鞘に覆われていた。
？基本、ＩＳ用の近接戦闘武器に、その威力の妨げとなるようなカバーや鞘などは付属していない。別にする必要がないからだ。
しかし、一夏の持つ刀には鞘が付いている。これも男というイレギュラー故か、と考えたがどうも違うらしい。この刀を昨日展開した際に箒に渡そうとしたのだが、一夏が離した瞬間細かい光の粒子となって消滅してしまった。原因は不明。しかし、とても高い斬れ味ーこう表現して良いものかーを誇ることもそのとき解った。以下、回想。
？なんだかよく解らんが白式には名称未明の近接武器が展開出来るらしい。しかし一覧というのは一個しかないときも一覧というのか。

「そんなことはどうでも良い。これは試さなければならないだろスパーダ一族の家訓的に考えて」
「なにを言っているのだ、一夏？」
はっ。箒の突っ込みによって現実に帰還する。今、なにか、宇宙意思のようなものに意識を奪われた気が、、、。不味い。この話題は危険だ。思考を放棄する。
コホン、とワザとらしい咳をし、再び無銘ーこの刀の名前だーを、静かに構える。前方には、破壊することは不可能だと生徒の間でまことしやかに囁かれている実験機Ｍａｒｋー？。このマーくん（愛称）は、ただ生徒の新技や新しい必殺技、または破壊技を試す為に造られたらしい。ー不憫すぎて、涙がでる。どうせ、あの人が造らせたんだろうと、唯一の肉親の顔を思い出す。
話が逸れてしまった。マーくんをふと見る。何故か、諦観の念を感じる。相手はロボットなんだからそんな筈ないのだが。

「立派なロボットなんだが、これ以上苦しめる訳にはいかんな。ー俺で最期にしてやる」
言うが早いか、一夏は刀を素早く抜刀し、目にも止まらぬ速度でコレを振り抜いた。目に見えぬ、一本の筋がマーくんに飛んで行く。その振り抜いた姿勢から、何度も何度も刀を振るう。最後に大きく後方に刀を払った後、非常にゆっくりした動作で納刀する。キィン、と音を立てて納刀し終わった直後、後ろにただ立っていたマーくんが半分に切断され、崩れ落ちていた。

以上、回想終。

その後は特にやる事も無く、実習は終わった。姉貴にも、良い処を見せることが出来たと思う。珍しく褒められたし。

あれ、なにか忘れているような、、、、？

？　　？

MISSION6　IS（後書き）

随分時間あけての更新で済みません。これも単に、筆者がクズなだけです。人間的な意味で。

ＭＩＳＳＩＯＮ７　予兆（前書き）

すいません、沸いていたのは作者の頭です。完徹３日目の異常なテンションで書き上げたのが先日の駄作です。人間、一時のテンションで行動するモンじゃ無いですね…。あまりの黒歴史振りに死にたくなります。

まあ、作者のそんな残念な話は置いといて。今回アップしてある方が本話です。そもそも、タイトルからして違いますし。
最後に、作者の錯乱によって失望した人には、誠心誠意の謝罪を。
本当に、申し訳ないです。

MISSION7　予兆

?その日の放課後、というか夕食後の自由時間。クラスの皆が、俺のクラス代表就任を祝ってパーティーを開いてくれるというので、俺は寮の食堂にいた。

『織斑くん、クラス代表就任おめでと〜！』

そんな言葉とともに、クラッカーのヒモが勢い良く引かれ、紙吹雪と色彩鮮やかな紙テープが俺に降りかかる。
壁に目を向ければ、そこには大きい紙に、

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』

とでっかく書いてあった。たかがクラス代表が決定しただけで騒ぎ過ぎではないか、と思わないことも無いがそれはそれ。祝ってくれることについては、素直に嬉しい。
少々、手が混み過ぎている気もするが。
「織斑君、はいこれジュース。あと、乾杯の音頭よろしくっ！」
俺にペットボトルのジュースを差し出し、そう言ったのは今回のパーティーの企画をした女子で、サイドて纏められたポニーテールが特徴だ。
「了解」
俺はペットボトルの蓋を外し、何を言おうか考えながら口を開いた。
まずは、お礼からだろう。
「今日は、俺の為にこういう場を設けてくれてありがとう。皆の期待に沿えられるよう、頑張って行くんでこれからもよろしく。ーでは、皆ペットボトルの蓋取って。乾杯？」
「「「「「乾杯ッ？」」」」」

それぞれ周りの人と祝杯を交わす。パーティーの始まりだった。
妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～　？　？　？　？
？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？
？　？　ＭＩＳＳＩＯＮ７　予兆

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」
「ほんとほんと」
「ラッキーだったよねー、同じクラスになれて」
「ほんとほんと」
宴も酣、それは良い。しかし、さっきから相槌打ってる女子、俺の記憶に間違いが無ければ二組だった気がするんだが。
突っ込むまいと思っていたが、明らかに三十人以上集まっている。おかしいだろ。と、箒が不機嫌そうに話し掛けてきた。
「人気者だな、一夏」
「別に。ただ男っていう物珍しさに集まってきてるだけだ。客寄せパンダとそう変わらん」
俺は、吐き捨てるようにそう言った。

「…ふん」
私は鼻をならして茶を飲んだ。全く、この男は。自分に寄せられる好意に対して無頓着過ぎる。
？一夏は、幼馴染の私が言うのもなんだか贔屓目になってしまうかもしれないが、顔立ちは悪くない。むしろ、かなり整っている。俗に言う、イケメンというヤツだ。
身体もかなり鍛えられているのが、制服の上からでも分かる。
そして何よりー強い。
それはまるで、鬼神のように。
先日の決闘以来、周囲の一夏を見る目は一変した。
以前のそれは物珍しさと好奇心が大半だったが、今のそれは畏怖と

尊敬の念。それと、私にとっては忌々しいことだが、恋する乙女の熱視線が多数。頭が痛い。
「：はぁ。」
「どうした箒？何故、俺の顔を見ながらため息をつく。なんか顔に付いてるか？」
そんな私の心情など知る由もない一夏が、素でそう聞いてきた。
「別に。なんでもない」
はぁ。心の中で、もう一度ため息をつく。どうせお前に私の気持ちは分かるまいと、悪態を吐きながら。だから、それはあまりにも予想外だった。

くしゃり、と。突然、頭を撫でられた。驚いて顔をあげると、其処には悪戯好きの悪ガキのような笑みを浮かべた、一夏が私の頭を撫でていた。

瞬間、顔が沸騰するのが自分でも解った。なにかを言おうと口を開くが、あ、とか、え、とか、言葉にならない嗚咽しか出てこない。そんな私の痴態？に満足したのか、私の頭から手を離す一夏。
「あ、、」
私の口から、まるで名残惜しむかのような、いや名残惜しくなどないが、声がでる。
突き放すように距離をとり、深呼吸をする。落ち着き、ようやく声がでた。
「こ、子供あつかいするなっ」
違う、こんなことが言いたいんじゃないのに。

何か箒が悩んでる様子だったので、パティにしてやる癖で頭を撫でてやったら、やたらと距離を取られた。なんか、子供あつかいすんなとか言ってる。が、構わず声を掛ける。

「そんだけ元気なら上等だな。ーなんか悩みとかあるんなら、相談ぐらい乗ってやるぜ？ま、幼馴染割引ぐらいはしてやるさ」
最後に軽い冗談をはさんだが、今の言葉は偽りの無い本心だ。しかし、箒は素っ気無かった。
「いい。自力でなんとかする」
「つれねぇな」
まあ、箒らしいっちゃあ、箒らしいけど。
素っ気ないが、箒の不機嫌は治まったようだ。少なくとも、仏頂面ではなくなってる。こいつ、不機嫌そうな顔してなきゃ可愛いのになあ。勿体無い。ま、ここでそんな事言っても無駄だが。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑君に特別インタビューをしに来ました～！」
オーと一同が盛り上がる。
「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」
名刺を受け取る。予想通り、画数が多い。別に、俺とは何の関係も無いけど。
「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」
ボイスレコーダーを俺に向け、目を輝かせながらこっちを見ている。
「特には。でも、クラス代表をやる以上全力を尽くしたいと思います」
「おっ、クールだね。いいコメントありがとう」
「いえ」
丁寧に対応しておく。俺のシックスセンスが、この人の前では隙を見せてはいけないと囁く。
下手なこと言って、ある事無い事書かれたらたまったモンじゃ無い。
俺のそんな態度が功を奏したのか、黛先輩の関心はセシリアに向かったようだ。

…やはり、俺の予感は正しかった。セシリアと黛先輩の遣り取りを聞いてそう確信した。
「じゃ、いいや。織斑君に惚れたからってことにしとくね」
「なっ…！」
ほらな。セシリアの顔は怒りで真っ赤になっている。流石に、そこまで怒ってると軽く落ち込むんだが。しかし、そんなブロークンハートを悟られないようにセシリアの援護を行う。
「ハッ、何を馬鹿なことを。そんなこと、ある訳が無いでしょう」
なんか、場の空気が凍った気がする。心無し、皆セシリア８、俺２ぐらいの割合で、俺達のことを哀れむ目で見ている。気が、するだけだ。

勿論、セシリアが一夏に恋する乙女の一人であることは一夏を除き、周知の事実である。それがフラグごと一刀両断されたとなれば、いくらライバルとはいえ憐れみの情を抱くのは、人の性といったところであろう。一夏に恋する乙女に、悪いヤツはいないのである。多分。
そして刻は動き出す。
「そ、そうですわ！なにを根拠に馬鹿なんてっ？」
セシリアが憤慨し、俺を責める。あれ、なんで俺？
ていうか、セシリアちょっと涙目になってない？俺の気のせい？

そんな遣り取りを傍目に、薫子はクラスの女子に事情聴取。
「彼、いつもああなの？」
「ええ、まあ」
「そっか。気苦労が絶えないね」
「まあ、それも彼の良いところですから」
恋は盲目。そう、後日薫子は語ったという。

その後は大変だった。セシリアを宥めたり、それを写真に撮られた

り。挙句、箒までまた不機嫌になる始末である。
結局、二人とそれぞれツーショットの写真を撮ることで治まった。
しかし、二人だけではなく、クラスの皆が私も私もと言ってきたのには流石に吃驚だ。
もしかして、俺ってモテてるのか？一瞬、そんな考えが脳裏に浮かぶが、一秒で取り消す。
？ハハハ、無い無い。俺に笑顔を見せてくれるからって、この娘俺に気があるんじゃないかなんて誤解は中学生までだ。全く、エロゲーじゃ無いんだから。
どうせ、俺が男で珍しいだけだ。そう箒に言ったのは、自分なのに。
そんな勘違いしそうになるとは。
うわ、すっげー恥ずかしい。
こんな日は早く寝ることに限る。そう考え、俺は足早に自室に戻った。

その日、何故か懐かしい夢を見た。一緒によく遊んだ少女。彼女の名は、確か…

そこで目が覚めた。結局、彼女の名前は分からなかった。

？

ＭＩＳＳＩＯＮ７　予兆（後書き）

あれ？鈴はどこに？今回だす筈だったのに。次は出ます。…多分。
本当に、すいませんでしたっ？ｇｒｚ

MISSION8　再会（前書き）

後編です。

ＭＩＳＳＩＯＮ８　再会

「転校生？」
昨日夢に出てきた少女の名前が思い出せずにイライラして寝れず、若干寝不足だった俺は思わずそのまま聞き返した。
「うん。なんでも中国の代表候補生なんだってさ。織斑君知ってた？」
「いや、知らなかった」
というか、初耳である。しかし…
「…中国、か」
なにか、引っかかる。その違和感を探ろうと集中しようとしたが、思い直し中断する。
思い出せないから、どうせ大したことじゃないんだろう。そうに違いない。
「一夏、なにか心当たりでもあるのか？」
俺の独り言に、反応した箒が尋ねてくる。が、
「な訳無いだろ。生憎、中国人に知り合いは…」
いない、と続けようとして俺は口を閉じた。頭の中でスパークが弾け、忘れていた記憶がフラッシュバックする。
思い出した。なんで、忘れていたんだろう。そうだ。夢の中に出てきた、あの少女の名前は…
「確か、あいつは「まさかいない、なんて言わないわよね。ねえ、一夏？」
声のした方向に視線が集中する。其処に居たのは、
「：鈴？その声は、鈴か？」
今朝の俺の寝不足の元凶、夢の中に出てきた少女…凰　鈴音その人だった。
妄想ＩＳ～もし一夏があの人の弟子だったら～　？　？　？　？

？？？？？？？？？？？？？？？

？？MISSION8　再会

「正解。…でもその様子だと、私のことすっかり忘れちゃってたみたいね？」
鈴が、じとっとした目で俺を睨み付けてくる。口調こそ丁寧だが、これは間違いなく怒ってる。

ーああ、本当になんで忘れていたんだろう。懐かしい。俺の幼馴染は、確かにこういうヤツだった。
しかし、今は感傷にひたっている場合ではない。
とりあえずは、目の前の爆弾を無効化しなければ。
「そんなことは無いぞ、鈴。今だって、すぐに鈴だと分かっただろ？」
爽やかな微笑みとともに、九割の嘘と一割の真実を吐く。嘘を上手につくコツは、虚構に一分の真実を混ぜることであると、レディさんも言っていた。
「ダウト。アンタ、今中国人の知り合いはいないって言いかけてたじゃない」
チッ、鈴にこの手は通じなかったか。ならば、次善の策だ。
「そんなこと無いって。それよりも鈴、お前どうしてここに？」
話題のすり替え。これも、レディさんに習った交渉術の一つだ。主に、師匠に行使されることが多かったけど。特に、金銭的な報酬をちょろまかされることが。
というより、師匠の交渉が下手というか、やる気がなさ過ぎるのである。
なので、最近は俺が師匠の代わりに交渉することが殆どだった。師匠は基本的に悪魔関連の仕事を断ることをしない。たとえそれが、雀の涙程の報酬でも。
それは大変素晴らしいことで、師匠の尊敬すべき一面でもあるのだ

が、それでは生活していけないのも確か。よって必然的に、稀にいる金持ちの依頼主から大金をせしめることになる。
何故なら、どんなに大金を積まれても師匠は気に入った仕事しかしないし、俺程度で師匠の説得が出来る筈もないからである。
しかし、慣れるまでは地獄だった。
それこそ、慣れないうちは銃で撃たれたり青龍刀で斬りつけられたり夜道でスナイプされたりしたが、今ではスムーズに交渉できるようになった。交渉の場で大事なのは、相手に舐められないことである。
……。
あれ？なんの話してたんだっけ？
鈴の方を再び見ると、鈴は思い出したかのように手をポンと叩いた。
「あ、そうだった。私、アンタに宣戦布告しに来たのよ」
と、軽い調子で鈴はそう答えた。
あれ？なんの話してたんだっけ？
「どういうことだ？」
声のトーンを、僅かに落とす。鈴の顔を見つめて、本心を探る。
すると、あまりに場の空気が剣呑だからか。鈴は、弁明するようにパタパタと手を振った。
「そんなに警戒しないでよ。二組のクラス代表として、挨拶しに来ただけよ」
「ああ、なる程な。ーって、おい？違うだろ！俺の記憶では二組のクラス代表はお前じゃなかったぞ！基本的にクラス代表は変わんないんじゃなかったのか？」
動揺のあまり、ついノリツッコミになってしまった。いかん、冷静に。
「変わって貰ったのよ。ちょっとお願いしてね」
さも当然のように鈴は言い切った。…コイツの言う？お願い？がなにかは具体的には解らないが、絶対聞かない方が良い気がする。
と、ここまで呆然としていた箒やセシリア、クラスの連中が再起動

を果たしたようだ。すぐに、質問の集中砲火が俺に浴びせられた。
「ち、ちょっと一夏さん？あの方との関係を説明して下さらないかしら？」
「そ、そうだぞ一夏。別に気になる訳では無いが、幼馴染として聞いておくだけなのだからなッ？」
「あ、はいはい私もー。織斑君と転校生さんの関係私も知りたいな〜」
「わたしも〜」
クラスの女子ほぼ全員が俺の机の周りを取り囲む。別に質問に答えるのは藪さかではないんだが。ただ、こいつらはひとつ忘れている。まあ、鈴は違うクラスだし一応教えとくか。
「鈴？」
「な、なによ？」
俺が鈴に声を掛けた瞬間、俺と鈴の間を遮っていた女子達が道を開けた。まるでモーゼのようだ。なんてくだらないことは置いといて。クラスの女子達の統制された動きに若干引きつつある鈴に、腕時計を指差す。
「時間、大丈夫なのか？」
「ヤバッ、もうこんな時間？一夏、次は昼休みに食堂でねっ」
くるりと踵を返し、ダッシュで帰っていく鈴。どうでもいいけど、廊下は走っちゃ駄目なんだぜ？
「そんなことより一夏、早く説明しろ」
「そうですわ、一夏さん」
「「「「織斑君っ」」」」
ヒートアップするクラスメイト達。それは良いが、早く席についた方がいいよと言おうとした、その瞬間。刻は既に遅かったようだ。
パパパパパパパパパパンッ？
まるで出席簿で頭を何人も連続でハタいたような、音が轟く。まあ、そのまんまなんだけどね。
見れば、そこには阿修羅のようなオーラを纏った姉貴が。あーあ、

警告しようとしたのにな。
「貴様ら、五分前だぞ。各人の席に着け」
姉貴の遠雷のような声に、蜘蛛の子を散らすように自分の席に戻るクラスメイト達。
ブンッ。
澄まし顔で席に座っていた俺に、何故か出席簿の角で殴り掛かってくる姉貴。最小限の動きでなんとか回避する。
「突然何をする」
「お前が騒動の原因だからだ」
俺の非難に、怜悧に答える姉貴。
「本音は？」
「その顔が気に入らん」
神様。本当に、このヒトデナシと僕は姉弟なんですか？
あまりに俺の表情がアレだったのか、姉貴は冗談だと俺に言うと、何事も無かったかのように授業を始めた。
一回、ＤＮＡ鑑定して貰おう。俺はそう、心に誓った。

ＭＩＳＳＩＯＮ８　再会（後書き）

やっと鈴登場。これで先に進めます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5470s/

妄想IS～もし一夏があの人の弟子だったら～

2011年6月6日01時44分発行